

## 病院のお仕事いろいろ



命を見守る  
不妊治療の職人たち

胚培養士 産科婦人科

矢野 祐也(やの・ゆうや)胚培養士／右  
林 倫子(はやし・のりこ)胚培養士／左

矢野さんと林さんは胚培養士となって7年以上のキャリアを持つ、当院の不妊治療における縁の下の力持ち的存在です。当院では胚培養士が患者さんからお預かりした卵と精子、そしてその二つが受精した受精卵を大切に育てています。「卵や精子は命を生み出す担い手として扱います。体外受精には高度な技術と集中力を必要とします。それは、一瞬の気の緩みが卵の可能性を奪う事に繋がるからです。」矢野さんは当院初の胚培養士として数々の不妊治療に携わってきました。毎日、卵のこと、精子のこと、そして受精卵のことに集中して業務をしている胚培養士がいることが、治療の質を上げることに繋がっています。「顕微鏡を覗いて見える卵は美しく、日々その美しさに魅了されながら働いています。」「私たちが受精のお手伝いをした卵が順調に成長し、子宮に戻り、妊娠にいたったことを聞くと非常に喜ばしくやりがいを感じます。」林さんは大学で動物生殖学について学んだことを人にも活かせると知り、胚培養士の道を目指しました。「抗がん剤治療を控えた患者さんを対象に、卵や精子を凍結保存することも行っています。まだまだ世間の認知度は低いと感じますが、未婚のがん患者さんにとって、卵や精子の保存という選択肢が存在することを、もっと知ってもらえると、将来の喜びが大きくなると思います。」



新しい命の  
声なき声を聴く

新生児集中ケア認定看護師  
看護部 東病棟3階(NICU)

河野 美咲(かわの・みさき)  
副看護師長

河野看護師は新生児集中ケア領域看護のスペシャリストです。NICUは他の病棟と比べて特殊な面が多く、日々、生まれてくる命の重さを感じながら看護業務に従事しています。徳島大学病院のNICUに入院する新生児は、低体重や早産、または大きな病気を抱えて生まれてくることが多く、様々な医療的サポートを必要とします。保育器の中で育つ小さな命は、ことばで意思表示をすることはできません。そのため、新生児がケアを受ける対象であるにも関わらず、しばしば周りの大人の気持ちや事情が中心になってしまう場面があるそうです。「赤ちゃんが眠っているときは、面会に来たご両親や診察に来た医師にも、起こさないようにお願いします。もし対象の患者さんが大人だったら、お見舞いの方も医師も寝ている方を起こしたりしませんよね、と。あくまで赤ちゃんが中心となってケアが進むように心がけています。」彼ら新生児の持つ生命力は大きく、手のひらほどの大きさで生まれたにも関わらず、自発呼吸ができるようになり、自分の力で摂食できるようになり、やがて退院していく姿を見ると大きなやりがいを感じるといいます。河野看護師は今、NICUの災害対策に取り組んでいます。熊本の地震災害を教訓として、病棟に被害が出た際にどう避難させるのか、非常に大きな課題ですが、ひとりでも多くの命を救うために日々奔走しています。